

令和4年度 第2回地域医療構想調整会議議事録(概要)

日時：令和4年9月12日(月) 20:00~21:20

開催方法：Zoomによるオンライン開催

参加者：委員

松本 雅彦(議長)、桐澤 重彦、岩崎 彩、田中 洋次郎、清田 和也、遠藤 俊輔、
百村 伸一、藤岡 丞、黒田 豊、吉田 武史、丸山 泰幸、鈴木 慶太、
堀之内 宏久

埼玉県担当者：保健医療政策課；副課長、主幹、主査

事務局：保健部長、保健部副理事、地域医療課長 外

発言：(○委員、●埼玉県、△医療法人へブロン会大宮中央総合病院)

※注：事務局で適宜、表現を整理しています。

【協議内容】

議題(1) 病床機能転換について(医療法人へブロン会大宮中央総合病院)

埼玉県保健医療政策課より、資料1、追加資料1、2を用いて説明

医療法人へブロン会大宮中央総合病院より、資料2-1、2-2を用いて説明

(質疑応答)

○ 令和3年3月に、東3階病棟を地域包括ケア病棟からコロナ患者専用病棟に転換しているが、この病棟の入院基本料は、急性期一般入院料4で45床としている。今回、療養病床46床を一般病床の急性期に転換することになると、コロナ患者専用病棟がなくなった時、急性期病床が約90床増えることになるのか。

また、コロナ患者専用病棟を急性期一般入院料4としているが、病床稼働が急性期一般入院料4を満たすかどうかがあるかと思うが、それについては今までどのように対処したのか。

△ 地域包括ケア病棟からコロナ患者専用病棟に転換した際には、地域包括ケア病棟入院料の13対1の看護師配置ではなく、急性期一般入院料の10対1を確保した。それに合わせ、現在17床の病床を確保している。今後、コロナが収束した際には、コロナ患者専用病棟から地域包括ケア病棟への転換を計画している。看護師配置に関しては10対1から13対1になるが、現在、7対1に準ずる人数は確保している。

○ コロナ患者専用病棟への転換について、コロナの激変対応で、臨時の移行

措置を使われているのではないのか。

△ 臨時措置ではなく、一般病床の10対1の届出を提出し、コロナ患者専用病棟を開設した。

○ 地域包括ケア病棟のままで、コロナ患者を受け入れることはできなかったのか。

△ 一般病床の10対1の急性期一般入院料4に転換している。

○ 後方支援として一般病床が必要な状況とはどういう状況なのか。また、療養病床の慢性期から、なぜ一般病床の回復期又は地域包括ケアの13対1ではなく、急性期の10対1にするのか。

△ 現在、10対1の一般病床は東4階・東2階の2病棟である。後方支援として高度急性期病院からの受入数は多い日では4～5件、当院からの予約入院が3～4件である。患者受入れの際は、10対1の一般病床に受け入れてから回復期、療養病床へ転棟させているが、医療区分に当てはまらない患者については、療養病床に転棟させることができずに一般病床から退院させることが多い。空いたベッドで後方支援をし、また救急を受け入れようとしているが、その一般病床ベッドが不足している。

○ 資料1の必要病床数と病床機能報告・定量基準分析結果との比較において、急性期は約7,600床多く、回復期、慢性期が少ないとあるが、現在その状況は変わっているのか。

● 現在、埼玉県全体でもさいたま圏域でも、急性期病床は過剰であり、回復期病床と慢性期病床は不足している。

○ 現在、急性期病床が足りないのは、コロナ患者専用病棟の45床を17床で運用しているからなのか。

△ コロナ患者専用病棟にしたため、通常の一般病床が少ないことも要因の一つである。なお、一方で機能的に病院の中でも改善を図っていて在宅支援がうまくいってきており、5割以上が在宅に帰っている状況で、それによって一般病床からの退院、療養病床からの退院が増えてきたという病院の変化がある。

○ 大宮中央総合病院の病床機能報告によると平成29年から令和3年3月までに急性期一般病床が最多の時は221床で、それから120床、現在70床と変わっている。またこれを160床に戻していくのか。

△ 急性期一般から転換した回復期リハビリテーション病棟があり、それは回復期になるので160にはならない。

○ コロナ患者専用病棟は、コロナが落ち着いたらなくなるのか。
△ 地域包括ケア病棟に変更することを第一優先とし、回復期リハビリテーション病棟を第二優先と考えている。

○ コロナが沈静化した場合、コロナ患者専用病棟を療養型又は回復期に戻すという話であったが、戻す具体的な基準をどのように考えているのか。

△ 地域包括ケア病棟への転換を考えているが、具体的なことは現状ではわからない。コロナの沈静化に応じて転換していくが、まずは現状を何とか打破していきたいので御理解いただきたい。

○ 現在、コロナが収束する方向であるが、8月・9月のコロナ患者専用病棟の稼働率はどのような状況か。

△ 9割以上である。

≪医療法人へブロン会大宮中央総合病院は退室し、委員による非公開協議を実施。協議後、医療法人へブロン会大宮中央総合病院が再入室。≫

○ 今、委員が協議を行ったが、急性期病床に転換することに関して異議が多かった。令和3年3月に地域包括ケア病棟からコロナ患者専用病棟に転換したが、コロナが収束した後は、どの病床に戻すのか。

△ コロナ患者専用病棟は、コロナ収束後は地域包括ケア病棟に転換したい。

○ また、今回の療養病床の転換は、一般病床の急性期病床ではなく、回復期又は地域包括ケア病棟に転換する方が良いのではないかと、という意見が多かった。

△ 回復期リハビリテーション病棟などに将来的には転換したい。

○ 結局、今、検討すべきことが2つある。現在のコロナ患者専用病棟と、今回療養病床を転換する急性期一般病床の2つについて、今後どうするのかを説明いただきたい。

△ 療養病床を一般病床にすることによって、入院の受入れを増やすことが可能になる。現在のコロナ患者専用病棟は、地域包括ケア病棟に転換する予定である。

○ 療養病床を転換する一般病床は、回復期リハビリテーション病棟や地域包括ケア病棟にするのか。

△ 一般病床の急性期の病棟である。

○ 現時点では、なかなか噛み合わない。引き続き協議する必要があると思わ

れる。大宮中央総合病院には、委員の意見を踏まえ、計画の見直しの可否等を御検討いただきたい。

△ はい。

○ それでは、継続協議とする。

議題（２）その他

（質疑応答）

なし

（以上）